

Title	現代の苦悶：再刊に際して
Sub Title	
Author	野村, 兼太郎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1946
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.39, No.1 (1946. 7) ,p.1- 7
JaLC DOI	10.14991/001.19460700-0001
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19460700-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

野村兼太郎著 新刊

隨筆 文化建設

西洋文化の基本的構成を消化して
新しい日本の文化を創造しよう

- 第一部 日本經濟史學の動向 その他
- 第二部 民族移動と文化 その他
- 第三部 わが國貿易論の變遷 その他
- 第四部 明治史の再検討 その他
- 第五部 商家家訓の一例 その他

B 六判 四〇四頁 三〇圓

高橋誠一郎著 重版

經濟原論

A 五判 三八二頁 三〇圓

小池隆一著 重版

民法大要

A 五判 一七〇頁

昆野和七校訂 新刊

福澤諭吉「女子教育論」

B 六判 一二八頁

三田慶應出版社

現代の苦悶

——再刊に際して

野村兼太郎

現在のわが國の状態は徹底的な敗戦の結果、一種の民族的虚脱に陥つてゐる。そこに生ずる不安・動搖・憂鬱・倦怠・絶望は歸一すべき中心を失ひ、將來に對する希望・理想と民族的自負とを喪失したためであるとみること
も出来る。しかし單にそれだけであらうか。今日の日本は精神的にも、物質的にも世界から孤立させられてはゐる
が、なほ世界の全體の動向から無關係といふわけではない。世界における大きな精神的及び物質的諸國向の一環と
して動きつゝある。

世界は兎に角戦を終つた。その點においては各民族とも一應一息ついた氣持になつてゐる。目下は戦争に依つて
生じた混亂を整理し、再編成するために忙殺され、靜かに反省する餘裕もないくらいではあるが、假令勝利を得た
國々にあつても、なほ期かに平和を喜び得る状態にあるとは思はれない。われわれの耳に入り得る世界の情報は極
めて乏しいものではあるが、それでも十分世界における不安・動搖・憂鬱を看取することが出来る。

現代の苦悶

第一次世界大戦後の経済的混亂が今回の戦争に有力な原因となつたことはいふまでもないが、さらに又一般の精神的弛緩が特殊の指導理念の發達を促がし、それが一層民族的對立を大きくしたことも認めなければならない。従つて現在世界が當面せる不安・動搖・憂鬱・倦怠・絶望は單に最近の一次的現象ではなくして、又第一次世界大戦後に初めて生じたものでもなく、近世史の第一頁からすでに始まつてゐる人類の苦悶なのである。

戦争に次ぐ戦争、革命に次ぐ革命を以つてしても、近代人は今なほ何ら確乎たる安定を得られない状態にある。たまたま戦争と戦争、革命と革命との中間における休息時——平和と呼ばれるが、眞實平和といふ名に値ひしない平和——に際しては虚脱と頹廢とが現れ、又それが故に次ぎの戦争又は革命を一つの刺戟として要求する。しかもそれらの戦争は一回毎にその大きさを増し、烈しさを強くし、人類の犠牲を漸次に増大しつゝある。科學も、哲學も、宗教も、これを救ふことが出来ない。否それを救ひ得ないばかりではない、むしろその強度を増大するに役立つかの如くみえる。原子力の利用が將來の戦争を極度に悲惨なものにする恐れのあることは、容易に豫斷し得るところであらう。

「人間は幸福のために生まれて來たのだといふことを、確かに、全自然は教へてゐる」と、アンドレ・ジイドはいふ(『新しき獄』)。しかし現代の人類は幸福を見失つてゐる。現在世界各国において現れてゐる諸現象は、幸福を求めつゝ苦悶してゐるといへよう。

古代又は中世にあつては、假令近世と同様戦争もあり、革命もあつたが、その一隅に幸福なる靜謐を樂しむこと

が出来た。今日ではそれが許されない。戦争は全世界を動搖せしむる。戦争に勝つも負けるも、又戦争の局外にあるも、程度の差こそあれ、不安・動搖を免れ得ない。そこに近代戦の特徴があると共に、人類の破綻への危機が潜んでゐる。何人も逃避することが出来ないのである。

* * * * *

日本にあつても同様の不安・動搖を感じ、共通の精神的・物質的混亂に陥つてゐることは認められる。しかし西歐諸國におけるが如く、中世においてキリスト教に對する信仰が絶對的でなかつただけ、近世的合理主義から生じた精神的動搖は少なかつた。むしろ淺薄な合理主義への迎合が徹底的な「我」の自覺を不可能ならしめ、低度の個人主義に安住する傾向を生じた。相次いで移植せらるゝ西洋思想を安易に採り入れ、深い思想的闘争を體驗することなく、次ぎから次ぎへと移つてつた。

内からの要求を缺いた思想は當然外形的模倣となる。外形上進歩したるが如く見えながら、事實は古い殘滓を多分に包含することになる。それは單に精神的にのみならず、經濟的にも同様である。古きものが、新しき形式の下にかくされてゐる。故に時の要請に依つて古いものは容易に復活する。それにも拘らず外形的發展は一應最も進歩せる形態をとつて人を僞備する。

加ふるに後進國の常として、又内的要求を伴はざる結果として、變革が當然踏むべき段階を経ずして行なはれん

とする。「今日の改革事業の危険は提議が順序なく降つて來ることである。先に來べきものが後から來る。後から來べきものが先に來る。例へば世人は家長権の上に築かれた古い社會を廢止する前に、婦人間題を提出する。男子を結婚や父権の義務から解放する以前に、婦人を男子の職業市場に入れる。學校の改造をやらないうで置いて、少女を男子の學校に收容しやうとする」(ストリントベルク「或魂の發展」)。そこに幾多の混亂と未熟とを生ずる。

殊に敗戦に依つて生じた急激な價値の顛倒は人人をして收拾し得ざる混亂に陥れ、彼等はただ右往左往するのみで、少しも事態の本質を握り得ない。利己的、功利的な面のみが現れ、極めて安價な愉悅に満足し、極めて安價な悲哀に絶望する。自らそれと闘つて、これを超克しようとする勇氣を缺く。そこに何ら創造的なものを生み出し得ない。安易に妥協せんとするか、又は自暴自棄に陥る。殊に經濟的缺乏は一層この傾向を強化せざるを得ない。食糧の缺乏は人間を野獸化する。

それらは世界史におけるニヒリズムとは似て非なるものである。それらから生ずる不安・動搖・憂鬱・倦怠・絶望は單に一時的なものに過ぎない。多少反省的であつても、それは外形的な自己嫌惡に過ぎない。一應の落着又は多少の好轉を生ずれば、直ちに樂觀し、自慰・誇負・慢心を生ずる。そこには眞の意味の自己批判を缺く。百八十度轉回は極めて容易である。それだけに民族にとつてその危機は極めて大である。

日本にとつて最も重要なことは嚴密なる自己批判である。それは單なる類型的な外的模倣ではなく、現實の日本の姿を——精神的にも、物質的にも——大膽に直視することに依つて始められなければならない。現實に存する虚

偽も、偽善も、怯懦も、廢頹も、罪惡も、劣弱も、すべて隱匿することなく、粉飾することなく、事實を事實として俎上に上せなければならぬ。かゝる反省を通じてのみ、新しき世界的創造へ參與することが可能である。

現在の日本はこの戦争に依つて、精神的にも、物質的にも甚だ大なる打撃を受けたことは事實である。しかしそれらの多くは單に外から受けた破壊に過ぎない。自らの反省に依つて生じた憂鬱でも、絶望でもない。もし現實を直視し、強く内に反省するならば、より大きな絶望を知り、より大なる打撃を受けるかも知れない。しかしすべて偉大なる成長は驚くべき破壊を伴ふ。大なる破壊の後に、大なる創造は起る。現實に對する絶望——虚無——は新しき理想への前提である。日本は今その試練に直面してゐる。破壊・破滅のうちから再生せんとしてゐる。

われわれは單なる觀念論に満足出來ない。「カントの望みしが如き、徳の理念に對する尊敬の感情によつてのみ存在する徳は危険である。徳、義務、善自體、即ち没個性な性質、普遍的價値な性質を有する善は幻想であつて、そんなものには、退化と生命の最後の虚脱と、コエニヒスベルヒの愚案が表現されてゐるのだ」(ニイチエ「反基督」)。

個々の本來の生存そのものを考察すべきである。實在は現に發展の途上にある。「合理主義にあつては實在はすべて永遠のうちに既製完成せるものであるといふに對し、プラグマチズムにあつては現實は今なほ生成しつゝあり、

その本質の一部を將來に期待してゐるといふ、が重要な對蹠である」(ジエムズ「プラグマチズム」)。われわれは實證に依つて現實を明かにし、成長發展しなければならぬ。科學的精神が如何に今日の文化に偉大なる貢獻をなしたかは何人も是認するところである。日本の場合の如き、如何に實證性、合理性を缺き、非科學的であつたかを知るべきである。

しかし科學には限度がある。憶説と假説とがある。その點においては科學も一つの信念から出發する。「吾人が未だ證明せず、證明し得ざる、そして吾人がたゞ信頼し、かつ信念の眼を以つて事實を眺めたる後始めて證明し得らるゝ假定から出發するといふことは、宗教においても、科學においても、共に認識方法として必要缺くべからざる基礎である」(F. S. O. シイラー「ヒュマニズムの研究」)。

科學はすべて類型的にみる。類型的にみる時、それは現實のそれとは異なる。マルクスの如きこれを人間的問題に適用して、社會的な「類型的存在者」として個人をみる。その點においては「經濟人」も同様である。それは個人ならざる個人である。科學はそこに限界がある。現實の人間は個性をもつ。個性の完成こそ人類本來の面目である。そこに人格に基づく倫理的要求の基礎がある。自由意志がある。「自由意志は救ひの教義といふ以外には何らの意味もない」(ジエムズ)とはいひ切れなす。

主觀を棄て、客觀に、神を棄て、科學に、絶對を棄て、相對に進んだ人間は再び主觀に、神に、絶對に赴かんとして迷ふ。それは單なる復歸であつてはならぬ。兩者の矛盾を克服するもの、虚無を越えて彼岸に至るものでなければならぬ。

ればならぬ。

個人の自由を主張し、個人の人格の完成を目ざすことは正しい。しかし人は社會のうちに生きなければならぬ。個人主義と社會主義とは今なほ對立する。少數者が多數者を壓迫することも、多數者が少數者を壓迫することも、個人にとつては同じことである。群集の支配も暴君の支配も何れも危険である。その矛盾はなほ解決されてゐない。そして解決されなければならない問題である。

現在は解決されなければならない問題があまりにも多い。しかもそれらは現實的には戰爭の危機をさへ孕む。それが故に苦悶しつゝある。安易なる妥協に自ら甘んぜんとする者と雖も、なほ絶えず不安に襲はれてゐる。われらが新しく平和日本の文化を建設せんとする意圖は正しい。しかし現實は日本にとつても、世界にとつても苦難の途である。矛盾を克服し、虚無を超越することは至難中の至難であるとしても、カントが永遠平和について結論するが如く、「公法の状態を實現する事は、たとへたゞ無限にそれに近づき得るに過ぎぬとしても、その充分なる希望が同時に存する時には義務である、しからば永遠平和は決して空虚なる理念ではなく、從來誤つてかく名づけられた(實は戰爭休止に過ぎぬ)平和締結をあまり経過した後、初めて現はれるもの、(而して同一の進歩が恐らくは益々短かき時間のうちに起るであらうから)徐々に解決されて絶えずその目的地に近づき行く課題である。」「永遠平和のために」われらは決して希望を棄てない者である。新しき文化の建設に最善の努力を盡さんと欲する者である。

(昭和二十一年三月十四日稿)